

<特別寄稿>

大江スミの衣生活に対する考え

—新聞、女性雑誌の記事をもとに—

山村 明子

英国留学以降の大江の衣生活や衣服教育に関する考えを、「三ほう主義」などの著作物に加えて、新聞・雑誌などに掲載された大江の執筆物をもとに整理した。

大江は女性が裁縫を行うことを重視し、経済性、合理性という観点で衣生活をとらえており、その志向は一貫している。そして、大江としての衣服への探求は自らの黒い洋服の装いに結実した。

キーワード：大江スミ 婦人世界 婦人画報 主婦之友 衣生活

1. はじめに

東京家政学院大学の創立者大江スミの著作物には「三ほう主義」（明治44年11月）、「家事实習教科書」（明治43年）、「応用家事精義」（大正5年）、「応用家事教科書」（上巻：大正6年、下巻：大正7年）、「実用家事教科書」（大正9年）、「礼儀作法全集」（昭和13～14年）、「女子礼法」（昭和16年）、「女大学」（昭和16年）が挙げられる。これらは英国留学での知見が土台となり、日本の女性に対する大江の思想、教育理念を表していると言えよう。「応用家事精義」は住居篇のみで、生活空間として住まいの環境を整えることに大江の関心が強かったことを示しているともいえる。

明治期の活字事情を鑑みると、書籍だけでなく女性向けの雑誌媒体が数多く登場し、女性たちへの新しい情報源となった。

女性誌の祖といわれる『女学新誌』（明治7年）が創刊され、翌年には文芸、啓蒙的な記事を掲載する総合誌『女学雑誌』、家庭生活の情報を掲載する『貴女之友』が創刊された。明治32年に高等女学校令が発布され、女子教育の機運の高まりは、女性読者層を拡大することにつながった。明治34年発刊『女学世界』以降は、女性誌の発刊が相次いだ。『婦人世界』（明治39年創刊）の発行の辞には読者が「家庭を中心とするの点に於ては良妻賢母たらんことを望むと同時に、家庭生活を基礎として、其性能に適合せる社会的活動をなさんことを望み」と言及し¹⁾、家庭における実際的な知識として家族、育児、家事全般、美容・健康、医療等の情報を掲載した。高等女学校での教育の様子を伝え、家庭の運営に必要な女中の扱い方などの記事が登場した。その読者層は当時の高等教育を受け、結婚後は使用人を持つ中流以上の家庭の女性と想定される。また、比較的上層階級向けの雑誌であったと位置づけられている『婦人画報』（明治38年創刊）は、上層階級の家庭生活のほかには海外の風俗も紹介する雑誌であった。そのほか、『主婦之友』（大正6年創刊）は増加傾向にあった中産階級の主婦層に対して、衣食住や家族の問題を具体的にわかりやすい内容を掲載し、多くの読者を獲得した。読者である女性たちは学校教育の場以外に、こういった雑誌から知識を得ることとなる。このような雑誌には名士夫人や下田歌子など当時の女性教育者らが寄稿をしており、その中には東京女子高等師範学校教授 宮川（大江）壽美子の名も

登場する。

本稿では大江の東京女子高等師範学校在職時と、大正 12 年家政研究所設立以降の新聞、雑誌の執筆物等を概観し、その中からこれまであまり注目されていない、大江の衣生活に関する言及を取り出し、そこから大江の衣生活への思想の一端を述べる。大江の活動に関する先行研究では、英国留学と家政学の受容に関するもの²⁾や、公衆衛生、住居衛生論、台所改善といった観点³⁾から言及されているが、衣生活に着目したものはない。しかし、当時の女子教育の普及には学校における裁縫教育の導入が大きな役割を果たしていた。衣生活の担い手としての女性に、裁縫技術を指導することに重きを置くことで、女子を進学させる契機としていたわけである。このように女子教育と裁縫教育のつながりが強い状況において、大江が衣生活と被服教育に対してどのような考えをもっていたのか整理することを目的とする。

2. 東京女子高等師範学校時代の執筆物

2-1 記事の概観

この時期の『婦人世界』（実業之日本社発行）と、『婦人画報』（婦人画報社発行）に掲載された記事の主だったものを表 1、2 に示す。

表 1：『婦人世界』実業之日本社発行

| 発行日 | 巻号 | 頁 | タイトル |
|-------------|-------------|---------|--------------------------|
| 明治 44 年 5 月 | 第 6 巻第 5 号 | 25 - 33 | 独身で暮らす覚悟 |
| 明治 45 年 7 月 | 第 7 巻第 7 号 | 48 - 49 | 臺所改良の意見 |
| 大正 7 年 2 月 | 第 13 巻 2 号 | 16 - 19 | 借家に住むは大きな損ですかうして住宅を新築なさい |
| 大正 7 年 3 月 | 第 13 巻 3 号 | 33 - 35 | 良人を向上させるは妻の務め |
| 大正 8 年 10 月 | 第 14 巻 10 号 | 76 - 78 | 白木綿と白麻織物を洗ふ呼吸 |
| 大正 9 年 8 月 | 第 15 巻 8 号 | 44 - 46 | 女學生にさせたい事 |

表 2：『婦人画報』婦人画報社発行

| 発行日 | 号 | 頁 | タイトル |
|-------------------|------|-----------|--------------------|
| 明治 40 年 1 月 1 日 | 1 号 | 48 - 50 | 日英家庭の比較 |
| 明治 40 年 9 月 1 日 | 2 号 | 18 - 22 | 滞英中の雑感 |
| 明治 42 年 3 月 1 日 | 24 号 | 10 - 14 | 私どもの覚悟 |
| 明治 42 年 10 月 15 日 | 33 号 | 29 - 32 | 西洋洗濯と日本洗濯 |
| 明治 43 年 5 月 1 日 | 42 号 | 44 - 48 | 女學生と臺所 |
| 明治 43 年 9 月 1 日 | 46 号 | 54 - 56 | 洗濯の仕方 |
| 明治 44 年 1 月 1 日 | 50 号 | 60 - 69 | 家の仕事に順序を立てよ |
| 明治 44 年 1 月 10 日 | 51 号 | 64 - 68 | 私が受けた精神教育 |
| 明治 44 年 5 月 15 日 | 56 号 | 117 - 119 | 家庭における児童 |
| 明治 44 年 6 月 1 日 | 57 号 | 70 - 72 | 家具の手入れ |
| 大正 3 年 7 月 1 日 | 98 号 | 6 - 10 | 着物の繕ひが出来る日本婦人は仕あはせ |

この 2 誌の記事内容を確認すると、『婦人画報』の「日英家庭の比較」「滞英中の雑感」のように、英国の生活をもとにした記述は後に発表される「三ほう主義」に通じている。また、これら以外でも「三ほう主義」にて述べられていることと重複する内容が多い。例えば『婦人世界』の「独身で暮らす覚悟」

でも、記述内容の半分は「三ほう主義」で取り上げている、日英の婦人の生活の違いを述べ、日本の生活の長所と日本婦人は「仕合せ」であることを指摘している。

同様に『婦人世界』の「借家に住むは大きな損です」は、「三ほう主義」では「不動産を持つ人と持たぬ人との心掛の僅かなる差」で取り上げている内容と共通している。

その他に、『婦人画報』の「家の仕事に順序を立てよ」もまた、「三ほう主義」にて教育ある英国婦人の長所に一つとして、規律正しく時間を守る主婦の営みについて記した内容と通ずる。

また、「西洋洗濯と日本洗濯」という洗濯の知識に関する記事の内容は「家事実習教科書」のもとなっていてと考えられる。もっとも、「家事実習教科書」の記述と比較すると、女性雑誌掲載記事は、文体も平易で読みやすさ、わかりやすさに留意したものとなっている。西洋式洗濯の長所については『婦人くらぶ』（紫明社、明治42年9月）の「改良したき洗濯の仕方」でもすでに紹介しており、新知識を積極的に学び取り入れることを提案している。その後、「白木綿と白麻織物を洗ふ呼吸」でもその内容は紹介されている。

このほかにも、この時期の記事がのちの著作物の内容と関連するものが登場している。台所の設備等については、『婦人世界』での「臺所改良の意見」では「立ってゐて働けるやうに設備したいもの」とあり、さらに『婦人画報』掲載の「女學生と臺所」の記事にも共通する内容がある。この内容はのちの「応用家事精義」における台所の設備に関する内容につながっている⁴⁾。『主婦之友』においても、大江は「中流家庭に必要な實際的家政の執り方」を大正13年1月号から6月号まで4回にわたって連載している。その内容は「働きよい臺所は如何に設備すべきか」に始まる、台所周りの設備や、掃除の仕方、食器や台所用具の扱い方などであり、やはり上記と共通する内容である。

『婦人画報』初期に掲載された内容は「三ほう主義」の土台ともなり、「三ほう主義」が大江の思想の柱であることは確かである。さらにこれらから、大江が学校教育の場だけではなく、一般女性向けの雑誌の誌面を使い、その教育活動を展開していたと言える。

2-2 「三ほう主義」における衣生活への言及

次に、「三ほう主義」のなかの日英の比較における衣生活への言及を以下に示す⁵⁾。

英國では、衣服の如きものでも、多くは自分で作ることが少なくつて、大抵は仕立屋に出し、料理はコックを雇ふといふ有様ですから、従つて費用が多くかゝります。

即ち主人が獨身の時は、三百圓の生活を為して居たものが、妻も夫と共に交際場裡に立ちますゆゑ、衣服も流行風なるを造らねばならぬ、従て費用が二倍となる、つまり妻を迎へた為めに、百五十圓の生活しか出来なくなる譯でありますから、自然結婚する事が六ヶ敷くなります。

【中略】

我國の家庭では、一枚の衣服にても、洗濯して仕立直し、同じ箇所がすれぬやう前は後と遣換え、又は上を下にし、幾度も新調のやうな衣服として用ゐます。又子供が大きくなれば、兄の衣服は弟に、姉のものは妹に、夫々譲る事も自由に出来る、極經濟的な遣方であります。従つて僅少の収入でも生計を営む事が出来ますから、割りに未婚者が少なくなつてゐます。

日英の衣生活の差異について、英国の女性が衣服を自ら仕立てるのではなく、仕立屋に依頼することで、経済的な負担が大きいことを指摘している。これが、結婚生活の経済負担とも関わっているといい、反対に日本の女性は自らが衣服を仕立て、仕立替えもすることで、経済的な負担が小さいという。このような経済性の違いが、英国では未婚者が多くなり、日本では未婚者が少ないという社会全体の問題とも関わっていると、大江は考えている。つまり日本の女性は裁縫をはじめとして家事の技術を身につけて

いることが、経済上で有利であり「社会組織の上にも大なる関係」を及ぼすという。

『婦人画報』掲載の「着物の繕ひが出来る日本婦人は仕あはせ」という記事タイトルは、まさしく裁縫の技術を身につけている日本の女性は幸せである、という主張そのものだ。ただし、この記事は着物の仕立てというよりも、衣服の管理について言及している。冬物の一般的な片付け方、洗濯についてではなく、金モールのついた礼服や、金糸銀糸を使用した高価な帯の扱いの注意を述べている点が、上層階級を読者層としていた『婦人画報』ならではの点である。そういった読者層に対しても、家庭的実地技能に熟達することが、肝要であると説いている。そうでないとすれば、今後の日本社会に悪影響を及ぼすことを懸念している。

また、裁縫の技術の有無を家庭の経済性の問題だけとはとらえていない。「西洋婦人が裁縫が出来ぬ結果は、啻に前述のやうな不経済ばかりではありません。左に申す通り衣服の流行がはげしくなる事があります」として、洋服と和服の違いに大江の見解を示している。すなわち、西洋では家庭で女性が衣服を仕立ずに、外注することにより洋服は流行の変化が目まぐるしいと指摘し、その要因として次の三点を挙げている。「第一 衣服の構造上より變化を好む」「第二 改良進歩を圖るために變化はげし」「第三 仕立屋が買手の目を引く為に四季折々其形を變化す」である⁶⁾。独自の見解であるが、では流行が激しいことの何が問題であるのかは、明言していない。ただし、日本人が洋服を採用することには慎重になるべきと、大江は続けている。その理由の一つは洋服や装飾品といった無益な贅沢品を輸入することで、国家は金貨を流出することとなり、国家の経済上に問題であると述べている。この指摘を踏まえると、やはり大江の視点は経済性に帰結していると考えられる。

「三ほう主義」では、洋服は西洋人の体格や肌の色にはふさわしいが、身長が低い黄色人種が着用しても見栄えがしないことを述べ、日本の衣服を改良工夫して着用していけばよいと提案している⁷⁾。ここでは、観念的な説明に終始しているが、「応用家事教科書」では、被服衛生面における和服と洋服それぞれの身体への負担を具体的に解説し、和服の改良すべき点を指摘している。明治開国期の洋服導入以降、洋服の長所、短所と和服の長所、短所を衛生面、経済面などに着目した議論は繰り返されてきた。衣服の圧迫による骨格の形状の変形を示した図のように、大江の主張は19世紀半ば以降に欧米では指摘されていた医学的見地からの衣服の問題点を理解し、説明している（図1）。

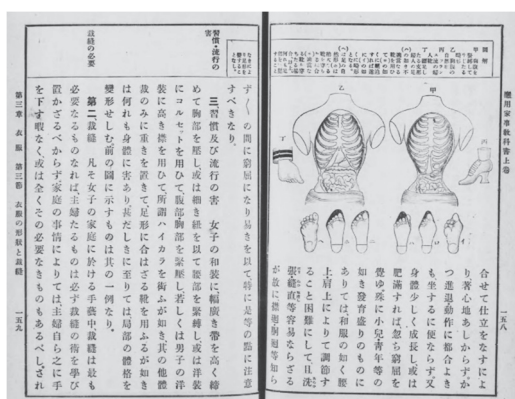


図1. 「応用家事教科書」第三章第三節 衣服の形状と裁縫

3. 家政研究所開設以降の大江スミの衣生活への考え

3-1 生活改善運動の志向

大江が自らの教育の場をつくろうとしたその思いについて、新聞では「自邸を校舎に宛て、家政研究所を作る 女高師教授大江すみ子さんが今後は木綿着で活動」という見出しで報じられた⁸⁾。取材に対して大江は次のように語っている。

何十萬圓と云ふ資金を要するので手をだすわけに行かずだれか篤志な富豪でも現れてと期待して居ましたけれど人様の力に依頼つて居たのでは何時になるかわからず一刻も早く実現したいと老母の賛成を得たので始めた次第です、此通り私は一切絹物を廃し木綿物でどんな場所へでも出て平気で居ます

ここでは、私費を投じて学校を開設するために、今後は絹の着物を着用せず、質素儉約に徹して木綿物を着用していこうという決意も伝えられている。とはいえ、木綿服の着用とは大江独自の発想ではない。大正後期には政府主導で生活改善運動が展開された。大正8年の11月30日から翌年2月1日まで文部省は「生活改善展覧会」を開催し、大正9年には政府は文部省の外郭団体として生活改善同盟会を設立した。生活の無駄を省き、より良い生活を実現していこうという思想は、様々な改善を生み出している。このような動きは、第一次世界大戦の影響もあり奢侈に流れた社会風潮を戒める意味があった。大江は井上秀子や中澤美代子らと当同盟会の中の住宅改善婦人委員に参画している。衣生活については入澤常子、二階堂とくよ、亀井孝子らが委員となった。衣生活の改善では和服の袂袖を短くする、袴の使用や礼装の簡便化などが提唱された。そして、その一部に着物の地質の見直しの提案があった。たとえば『婦人世界』でも贅沢を戒め生活改善に取り組む女性の意見が掲載されている⁹⁾。

この夏からは、着物は一切綿服、生活は簡易生活と極めてしまひました。【中略】かうして木綿物ばかり着てみますと、この方がよほど気が楽でございます。汚れても直ぐ洗濯ができますし、紺飛白などは、洗へば洗ふほど綺麗になります。それに絹物と違って、何となく身體が引締まつて、自然に心が着実になるやうに感じます。こんないいものをなぜ今まで氣がつかなくかつたらうかと、不思議に思つてゐるくらゐです

つまり、大江が木綿服の着用を思い立つにはこのような風潮があったといえよう。衣服を質素にすることは、理想の教育の実現を目指す大江にとっての決意表明でもあった。なお、木綿服による儉約案については、後に大江の発言にて再度触れられることは後述する。

3-2 東京家政学院の開設と教育環境

大正14年に東京家政学院を設立し、九段校舎が落成した。大江が腐心した理想の教育環境は『婦人画報』でも詳細に報じられた¹⁰⁾。その記事に登場する、衣生活に関わる施設設備の説明を抜粋する。

校舎の第一は廣く解放された教室、此处は講堂でもあり、半分は洗濯實習室でありました。

四五十人の本科生が、染色の講義を聴いて居るところで教壇に立たれた先生が標本の布を示され乍ら、「煮染め」「ふかし染め」などの一々の説明を加へられて居ります。此处を出ると廊下一■（印刷が不鮮明につき）が洗濯場で、コンクリートの洗濯臺には一ツツに水道と瓦斯が備へられて居ります。今し講義から實習に移つた生徒は瓦斯にかけた煮染の實習で、眞赤に染まつた布を洗ひあげたり、一方では派手な博多の夏帯を洗濯して居るのも見られました。

図2で確認できるように水道、瓦斯が一行に配置され、生徒がそれぞれに使用して実習に取り組める設備が整えられている。これは大江が東京女子高等師範学校の中で主張してきた、生徒が各人で実習できる設備を実現した一例である。瓦斯が備えられていることで、染色実習だけでなく、洗濯実習では西洋洗濯法である煮洗いにも取り組むことができる。大江が指導したい合理的な家事の技法を学ぶ場である。次に、裁縫室についての記述を示す。

「今日の時代では主婦は和服ばかりでなく、洋服裁縫を知つて居ることは必要のことであつて、五圓位ひの材料で出来る子供服を十五六圓も出して買ふなどといふのは馬鹿らしいことです、それに男の洋服も出来るのですから、実際に主婦がそこまで進んで、高い値を出さなくともいくらかも経済のとれるやうにしたいものです。」

可愛い子供の洋服が裁たれたり、美しい婦人帽がつくられたりするその中を見廻り乍ら先生は話を續けられました。

次に日本裁縫室、此処でも六七十人の生徒が熱心に裁つたり縫つたりして居ります。それに續いて選科の教室が並び、廊下には六七十臺のミシンが置かれてそれにかゝつて居る生徒の手で小刻みな騒がしい音があちらからもこちらからも入り乱れて聞へます。

冒頭のカギ括弧内は取材に答えた大江の言葉である。この内容は上述した、日本の女性が裁縫の技量を備えていることで家庭の経済に役立つという考えを、和服だけでなく洋服にも適応させていることがわかる。また、記述内容と図3で確認できる廊下に並んだミシンの設置から、こちらも生徒がそれぞれに使用できるだけの台数を備えていることがわかる。大江は執筆した教科書には具体的な裁縫の技術については言及していない。「応用家事教科書」の第三章第三節「衣服の形状と裁縫」においても、裁縫は女子の家庭での手芸のなかでも最も必要なもので、主婦たるものは必ずその技術を学ぶべきと述べるにとどまっている。そのため、和裁、洋裁技術の具体的な指導については不明である。手縫いに対して、ミシンは縫い物のスピードを上げ、家事の時間を節約するには便利な道具であった。女性雑誌には和服にもミシンを利用すると時間の節約になるという提案も登場した¹¹⁾。経済性と合理性を強く意識していた大江であったが、「時間の経済」を踏まえて和裁にもミシンの利用しようと考えたか否かは定かではない。

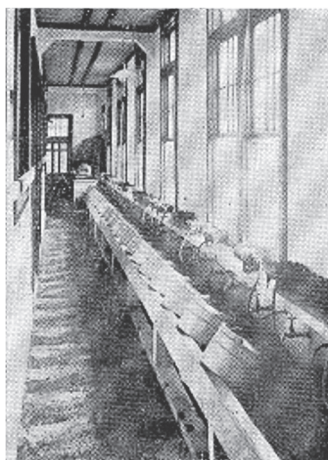


図2. 洗濯場の一部 『婦人画報』245号

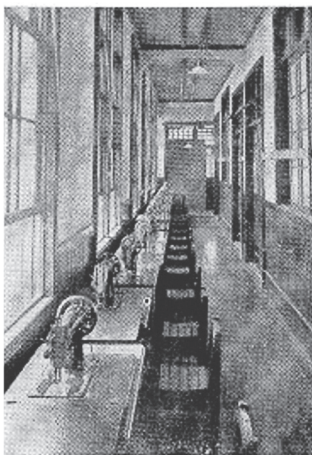


図3. 裁縫室の一部 『婦人画報』245号

大江の技術へのこだわりは本物の技を学ぶことにあった。これは大江が英国留学帰国後に、実験実習、実地教育に重きをおき、自身が実践したことでもあった。家政学院開設時の新聞記事には「実習の指導者には普通の教師の外に市内料理店洋服店呉服屋で永年腕をみがいた経験家を並べ」「裁縫では小川町齋藤洋服店の鬼頭金次郎氏や三番町の宮崎仕立屋ら」とある¹²⁾。一流の技術を習得することで家庭は不経済にならずに、家庭生活を向上させることができる、という考えが大江の目指した衣生活教育といえよう。

3-3 戦時下の衣服の経済性

既述のように、大江の生活の取り組みに対する評価は経済性という観点が強い。本節では、戦争により変化する国内情勢における衣服の経済問題への発言に注目する。

「三ほう主義」の中でも、目先の楽しみとして衣服へ余分な支出をすることは、生活のためにはならないことを説明している。仮に二百円前後の下賜金をいただいた場合にどのようにそれを使うべきかという内容で、その金を元手に借金をして不動産を手に入れることが得策で、その反対に「妻なる人がまじめでなく、衣服の事などを考へ、夫にこの御下賜金にて縮緬の羽織をこしらへて下さいとねだる」と結果として、少額の支出を積み重ねるだけで、生活が改善されることはないという¹³⁾。必要以上の衣服を欲しがすることは、賢明ではないという考えだ。少額の快楽を追究することで、人生における重要なことを手に入れることができなくなるという経済的視点は、21世紀の低価格ファストファッションの問題とも実は通じている¹⁴⁾。少なくとも大江は借金をしてでも不動産を入手することは、将来につながる大きな投資と考え、一方、衣服への支出に関しては、厳しい意見を持っていた。

女性雑誌には単独の執筆以外に、テーマに応じて識者を集めて意見交換をする座談会形式の記事も登場する。このような記事にも大江の参加が認められる。非常時局に際して、消費節約を促す意図があった座談会では、和服と洋服の大きな無駄について意見を出し合った。大江は着物の種類に大きな無駄があり、その筆頭は婚礼衣裳であると発言している。「たつた十五分間位しか着ない振袖などを幾枚も作る方が相当あるやうですが、この際、そういつた無駄を徹底的に廃止して頂きたい」と、婚礼衣裳や結婚に際していろいろと着物を支度することを無駄といい、その分は貯金をして将来の生活に備えることが有意義であることを説いている¹⁵⁾。ただし、大江は「着付けと理容」という授業では、婚礼着付けの第一人者初代遠藤波津子先生を講師に招いて、婚礼衣裳について生徒に学ばせていることや、昭和6年の座談会では授業用に振袖を一枚購入したことを発言している¹⁶⁾ことから、婚礼衣裳を無駄と断じたことはこの時期ならではの極論かとも思われる。とはいえ、大江の衣服に対する姿勢を示していることは確かである。

翌14年には大蔵省は貯蓄奨励委員を組織し、大江もその一員となった。これは戦争の長期化に備えて年間80億円の貯蓄額を目指した国民貯蓄運動を推進する役割であった。大江は単独で、読売新聞に「八十億圓貯蓄を全部女性の手で」と題した広告をうった¹⁷⁾。戦争に向けて国家の財源を築くために、国民が総力を挙げて貯蓄に取り組む。その中でも一家の消費経済を預かる主婦が、率先して家計費の無駄を省けば目標達成は容易になるという。文中の見出しも「生活の無駄を省け!」、「無駄は簞笥の中にある!」とあるように衣服に対して厳しい目を向けている。

皆様の簞笥の中にも、きつとこのやうな、日常少しも必要でない着物、一度も袖を通さぬ着物が、澤山蔵ひこまれてあるに違ひありません。しかも毎年毎年、春につけ秋につけ、新しい流行衣裳が賣出されるたびに買求め、二度か三度着ては、もう流行遅れだと、簞笥の中に蔵ひこんでしまふ、これほど無駄な、これほど不経済な生活があるでせうか。

また、「着物は家庭で染替へて!」という見出しでは、衣服を再生することで国家の財源を豊かにしよ

うと呼びかけている。

この際衣服は簡素であるから美しく、質素であるから奥床しく更らに廃物利用であれば一層の氣高さが現はれます。

古い着物は従来洗張りをして役立てて参りましたがなほ色が褪せたり柄が流行遅れになつたりした場合には、現在では立派な家庭染料が出来てゐてどんな素人の方にも家庭で立派に染められるのですから私達銃後の婦人は當分新しい衣服を求めず古い着物を再生して用ひませう。

女性たちが衣服を無駄に増やさず、古いものも染替えをして節約をすれば、貯蓄に回すことができ、結果として国家の財源を豊かにすると、鼓舞している。

本章1節で触れたように、家政研究所開設の折には、質素節約のためにこれからは絹物ではなく木綿主義と宣言した大江は、昭和13年に開催された「国産絹の会」の講演会では、木綿よりも「絹の方がよいことは申す迄もありませぬ」と語っている。その理由として、木綿は安価で丈夫であるが、日本国内での綿の生産量が減少したことから、木綿を輸入することで外貨を失うことになることを指摘している¹⁸⁾。なぜなら、戦争に必要なガソリン燃料を輸入するために、外貨は貴重であるからだ。それに反して、国産の絹は品質にも優れているうえに、これを利用することで国内産業を發展させることになる。また、絹は優れた品質ゆえに幾度でも洗い張り、縫い直しができ、長きにわたって着用することができるので、かえって経済的であることを述べている。流行の変化に激しい洋服と違って、流行り廃りのない日本の着物の構造自体も、仕立替えに適しているからこそ、それだけ衣服を長持ちさせて使用するには丈夫な絹の方が適していると説明している。

戦時下といっても大江の主義主張は根本的には一貫している。衣服の経済を個人的な視点にとどめず、国家の経済へと拡大して解釈している。

3-4 大江スミと洋服

2章2節で取り上げた通り、大江は洋服には流行の変化があるので不経済だと主張している。だが、実際には洋装の大江の写真は数多く残されている。図4は昭和4年に掲載された「家事家政 やりくり座談会」に出席している大江である。この



図4. 座談会スケッチ 大江先生
『婦人倶楽部』10巻12号



図5. 現代名流婦人
宮川壽美子女史
『婦人画報』51号

座談会のテーマは台所や衣服、住宅、交際の無駄を省く方法についてである。ここで、他の参加者たちは衣服の経済的工夫については、買い物の仕方、広幅ものを利用した裁ち方の工夫などにまず言及している。その中であって大江は「洋服は身体に合ふ様に作つてゐますから、すつと着ればそれでいいのですが、和服だと毎日着付の時間が多少ともかかつて、それだけ時間が損です。」と発言している¹⁹⁾。衣服の着用に要する手間と時間の経済性を考えた発言は、この中では大江だけである。この座談会の出席者7名のうち、洋装は大江を含め2人である。この時期には洋服のデザインはストレート

シルエットの身体への負担が少ないものが登場していた。図4の大江が着用しているものもそういったワンピースであろう。ここから、大江がただ洋服を批判し、和服を称賛していたわけではないことがわかる。雑誌に掲載された座談会には、大江はこういったワンピース姿でいつも登場している。図5のように大江が留学時代に体験した20世紀初頭のドレスはコルセットなどでウエストを圧迫し、床丈のスカートの裾を引くといったスタイルで身体への負担も大きい。こういったドレスと比較すると身体への負担が軽減された洋服は、大江にとってはむしろ和服よりも合理的と見做されたのではないか。

東京家政学院大学で教鞭をとった中原暢子は、昭和20年に東京家政専門学校に入学し、23年3月に卒業した。大江には家事概論と英語の教えを受けたという。当時の大江について「服装は、毎日、多分夏も冬も、黒のロングドレス、衿なし、うちあわせ風で、袖口の広い長袖だった。学生は、『大江先生は同じデザインの服を何着持っていらっしゃるのかしら』とよく話題にしていた」と回想している²⁰⁾。23年1月に亡くなった大江の最晩年の姿である。複数の写真を見比べると、必ずしも同一のデザインではなかったと推測されるが、黒地でストレートシルエット、長袖、衿なしという大江のワンピースドレスは、大江の衣服哲学そのものであると考える。その構造からみて、仕立て方はシンプルで、着用の簡便さが推察されるだけでなく、類似のデザインで衣服を誂えることで毎日の衣服選択においても、余分な手間暇を省くことになる。それでいて、着物のような打ち合わせ風をあらわしたり、袖口がゆったりとした黒一色のワンピースに白いロングネックレスを胸元にあしらった姿は黒紋付のように改まったイメージを醸し出している。

大江が服装の表現について言及した著述は極めて少ない。ただ、明治42年に子どもの洋服の色の配合についての記述からは、大江が服装の審美性にもこだわりがあることがわかる。子ども服に限らず、日本服の色遣い、西洋服の色遣いの特徴を捉え、色の配合によく注意すべきであると指摘し、「なぜ年相應な日本固有な上品な風をしないのか」「西洋服を用ふるときにも思ひ違をして年にも似合ぬ風をして却つて品格を下げるやうなことがありますから、よほど注意しないといけません」と述べている²¹⁾。大江が黒い服装を着続けた背景には、こういった大江の色への審美眼が自らに相応しい装いの色と選び出したのではないか。2章2節で触れたように、日本の服装にも衛生上や労働上に不便を感じるので改良したい点もあると「三ほう主義」では述べているが、和服と洋服の長所を組合せた、大江にとっての合理的な衣服への志向の終着点がこの服装であったと言える。

4. まとめ

以上、英国留学以降の大江の衣生活や衣服教育に関する考えを、「三ほう主義」などの著作物に加えて、新聞・雑誌などに掲載された大江の執筆物をもとに整理した。

ここで見えてきたのは、大江が経済性、合理性を重視して衣生活をとらえており、その志向は一貫しているということだ。そして、大江としての衣服への探求は自らの黒い洋服の装いに結実した。大江は住まいや生活環境の衛生を考え、合理的な家事の執り方を科学的に模索した。大江は裁縫の営みが日本の長所だというのが、裁縫や繕いなど衣生活を担う家事が、日本女性の家事労働の中でも長時間労働として大きな負担となっていたことも事実である²²⁾。経済を考えるうえで時間は重要な切り口だ。大江自身が、洋服は着用到手間取らずに時間の経済になることを発言しているところから、第二次世界大戦以降の衣服産業構造の変化に大江が直面したと想定すると、裁縫教育における「技術」とは何であると考えようになったのであろうか。これについては興味深い問題である。

また、大江が指摘した必要以上の衣服費の支出がうむ不経済性は、今日の衣生活の問題とも同調している。ここに大江の深い洞察力が垣間見える。

引用文献

- 1) 発行の辞, 婦人世界, 1 巻 1 号, 明治 39 年, 2.
- 2) 柴沼晶子, 英国留学で得たもの: 安井でつと大江スミの場合を比較して, 敬和学園大学研究紀要 8, 1999, 243-267.
関口敏美, 大江スミにおける家政教育論の形成と展開, 人間形成と文化: 奈良女子大学文学部教育文化情報学講座年報 3, 1999, 61-71.
- 3) 大橋竜太, 大江スミ留学当時の英国事情—公衆衛生および住宅・都市問題を中心として, 東京家政学院生活文化博物館年報 14, 2004, 53-63.
須崎文代, 16K18222 大江スミのイギリス留学による明治期の住居衛生論の導入と国内での展開に関する研究, 日本学術振興会 (JSPS), <https://cir.nii.ac.jp/crid/1040000781924710144>, 2024.6.20. 取得
和田菜穂子, 大正から昭和初期における台所空間の変容過程 教育者や建築家の提案から読み解く通史的考察, 家具道具室内史 15, 家具道具室内史学会, 2023, 65-94.
- 4) 和田は大江による「台所で改善したいと思ふ点」(『新女界』2 巻 6 号, 1910) でも同様の主旨が記載されていることを指摘している。
- 5) 大江スミ先生を語り継ぐ会, 増訂三ほう主義, 英和出版印刷, 昭和 62, 25-27.
- 6) 上掲書 5), 85-88.
- 7) 上掲書 5), 88-91.
- 8) 自邸を校舎に宛てゝ, 読売新聞朝刊, 大正 12 年 4 月 4 日, 4.
- 9) 四方田柳子, 恐ろしい贅沢の世の中, 婦人世界, 13 巻 10 号, 大正 7 年, 97-99.
- 10) まち子, 東京家政女學院を訪ねて, 婦人画報, 245 号, 大正 15 年 2 月 1 日, 30-32.
- 11) 速水信子, 時間を節約して有効に使ふ工夫, 婦人世界, 13 巻 12 号, 大正 7 年, 49-51.
- 12) 本物のコックや洋服屋さんなどが教える学校, 朝日新聞朝刊, 大正 14 年 5 月 29 日, 6.
- 13) 上掲書 5), 131-132.
- 14) アンドリュー・モーガン監督の映画「ザ・トゥルー・コスト〜ファストファッション真の代償〜」(2015 年アメリカ) の中でも, 低価格の衣服の購入を積み重ねることで, 人生に重要な教育費や, 住宅費といった支出が圧迫されていることが問題点のひとつであると指摘している。
- 15) 生活の切りつめ方座談會, 婦人倶楽部 19 (9), 昭和 13 年 7 月, 106-118.
- 16) 経済的な婚礼衣裳の座談會, 主婦之友 15 巻 10 号, 昭和 6 年 10 月, 324-327.
- 17) (広告) 大江スミ, 80 億圓貯蓄を全部女性の手で, 朝日新聞朝刊, 昭和 13 年 6 月 22 日, 6.
- 18) 大江スミ, 戦時下の衣料経済, 国産絹の会講演集昭和 13 年度, 日本中央蚕糸会, 昭和 14 年, 7-12.
- 19) 家事家政 やりくり座談會 (二), 婦人倶楽部, 10 巻 12 号, 昭和 4 年 12 月, 264-277.
- 20) 中原暢子, 大江スミの住まい—大江家政学と家政学院の創設まで—, 東京家政学院大学紀要 31, 1991, 1-14.
- 21) 宮川壽美子, 色の配合, みつこしタイムス 7 (臨時増刊 /8), 三越呉服店, 明治 42 年 7 月, 129-133.
- 22) アンドルー・ゴードン, ミシンと日本の近代 消費者の創出, みすず書房, 2013.